

**主 題：恵みシリーズ21、死人を生き返らせるイエス1**

**聖書箇所：ヨハネの福音書 11章17-36節**

今日、私たちは「ラザロ」という人物について聖書のみことばを学んでいきます。「わたしはキリストだ、救世主だ」と告白した主イエス・キリストをユダヤ教のリーダーたちは石打ちにして殺そうとしました。そのことは前回見たヨハネの福音書10章の後半に記されています。なぜ、彼らはイエスを殺そうとしたのか？彼らはイエスが語ったメッセージを理解したからです。イエスはご自分がだれであるかをはっきりと人々の前で明らかにされました。隠しておられたわけではありません。それを聞いた彼らは「この人は人間でありながら自分を神としている、神への冒涇だ。」と言って殺そうとするのです。

そのようなことがあって、イエスと弟子たちはエルサレムから東へと移って行きます。エルサレムから東へ行くとヨルダン川があります。イスラエルの地図を描いてみると、ガリラヤ湖と死海の間を流れているのがヨルダン川です。死海の少し北から西の方に入って行くとそこにあるのがエルサレムです。エルサレムから東へ行ってヨルダン川を渡った地域はペレヤです。そのペレヤ地方へイエス・キリストは弟子たちとともに移動したのです。

さて、ペレヤにいたイエスのもとに伝言が届きます。「自分たちの兄弟が病気である」という知らせです。ヨハネ11：3をご覧ください。「そこで姉妹たちは、イエスのところに使いを送って、言った。」と、この「姉妹たち」とは病気であるラザロの二人の姉妹、マルタとマリヤです。この姉妹がイエスのもとに使いをやって「主よ。ご覧ください。あなたが愛しておられる者が病気です。」と伝言を告げたのです。そして、皆さんもよくご存じのように、この後、主イエスが為されたみわざはこのラザロをその死からよみがえらせるのです。しかし、それだけではありません。その一連のすべての出来事を通して、主イエスが為されたことは、ご自分がいっただれであるかということを入念に人々の前に再び明らかにされるのです。

私たちはもうこのヨハネの福音書を学んで何度も教えられて来たように、主はそのことを繰り返して教えておられます。主イエス・キリストはだれなのか？はっきり言うなら「主イエス・キリストは真の神である。約束の救世主である。」と、そのことを再び人々の前に明らかにされるのです。そして、もう一つ言うなら、愛するマルタとマリヤ、この二人の姉妹たちがこの一連の出来事を通して信仰において成長することです。主イエス・キリストはそのことを望み、そのためにこの大切な時間を使われたのです。「ラザロの復活」、ごいっしょにみことばを見ていきましょう。

**☆ラザロの復活**

**A. 弟子たちの信仰が成長するのを助ける 7-16節**

この箇所には弟子たちの信仰が成長することを助けておられる様子が記されています。主イエスと行動を共にした弟子たちの信仰が成長するようにと。彼らはどのような信仰をもっていたのか？

**◎弟子たちの信仰**

**1. 主の決断に反対した 8節**

7-8節を見ましょう。「:7 その後、イエスは、「もう一度ユダヤに行こう」と弟子たちに言われた。:8 弟子たちはイエスに言った。「先生。たった今ユダヤ人たちが、あなたを石打ちにしようとしていたのに、またそこにおいでになるのですか。」、主イエスはもう一度ユダヤに戻ろう、あのオリーブ山に戻ろうと言われました。そのときに弟子たちは「だめですよ、イエスさま。彼らはあなたを殺そうとしています。なぜ、そこへ戻ろうとするのですか？」と、イエスの決断に対して反対しています。

**2. 主とともに死ぬことを互いに確認し合った 16節**

そこでイエスのいろいろな話があって、16節を見てください。「そこで、デドモと呼ばれるトマスが、弟子の仲間に行った。「私たちも行って、主といっしょに死のうではないか。」と、「デドモ」とは「ふたご」という意味があります。トマスはあの疑い深かったトマスのことです。主イエス・キリストがこのままエルサレムに上っていくなら殺されるに違いない、では、私たちもいっしょに殺されようと、彼らは大変な覚悟をするのです。そこで、主イエス・キリストはエルサレムに上ることは全く危険ではないということをお教えるのです。それが9、10節に記されています。「:9 イエスは答えられた。「昼間は十二時間あるでしょう。だれでも、昼間歩けば、つまづくことはありません。この世の光を見ているからです。:10 しかし、夜歩けばつまずきます。光がその人のうちにないからです。」、光のある昼間ならつまづくことはないけれど、光のない暗闇ならつまずいてしまうと、当たり前のことです。イエスは何を言われたかったのか？

先に言ったように、弟子たちはエルサレムに上っていくことは危険だと思っていました。そこでイエスは「そうではない」と言われます。心配しなくてもいいことを弟子たちに教えます。なぜなら、

### 1. 主の歩み : 光である主イエスの歩みは安全である

ヨハネ1:9に「すべての人を照らすそのまことの光が世に来ようとしていた。」とあり、イエスは「まことの光」であるとヨハネは記しています。また、8:12では「イエスはまた彼らに語って言われた。「わたしは、世の光です。わたしに従う者は、決してやみの中を歩むことがなく、いのちの光を持つのです。」と、ご自分のことを「世の光です」と言われています。だから、光があればつまづくことはないのです。光であるわたしが行くところには危険がない、つまづくことはないと言われるのです。だから、心配しなくてもいいと言われたのです。

### 2. 信仰者の歩み : 主とともに歩む者もつまづかない

そして、主イエス・キリストだけでなく、光である主イエスとともに歩んでいるならあなたもつまづかないと言われます。主イエス・キリストの恵みによって救いに与った私たちもそう思いませんか？信仰生活を振り返ってイエスとともに歩んでいるならつまづくことはありません。でも、イエスのことを忘れてしまってやみの中を歩み始めるなら、罪の中を歩み続けるなら、私たちは必ずつまずいてしまいます。ですから、主がそうであっただけでなく、私たち信仰者も同じことが言えるのです。光であるイエスとともに歩んでいるなら、まさに、昼間歩いているようにつまづくことがないのです。ですから、私たちがいかに主の前に正しく歩み続けるか、主が喜ばれるように歩むことが大切なのか、光である主とともに歩み続けることの大切さ、そのことをイエスは言われたのです。「心配しなくてもいい、わたしがいるのだから」と。ヨハネ9:4、5に「:4 わたしたちは、わたしを遣わした方のわざを、昼の間に行わなければなりません。だれも働くことのできない夜が来ます。:5 わたしが世にいる間、わたしは世の光です。」とある通りです。

## B. マルタの信仰が成長するのを助ける 3-6節、17-27節

このように弟子たちを励まされたイエスは、今度は17節のところからですが、マルタの信仰が成長することを助けていかれる様子が記されています。マルタがどのような人であったのかを聖書のことばが私たちによく教えてくれるので、ごいっしょにゆっくり見ていきましょう。イエスとマルタのやり取りが3-6節と17-27節辺りに記されています。

### 1. マルタからの使い 3節

3節「そこで姉妹たちは、イエスのところに使いを送って、言った。「主よ。ご覧ください。あなたが愛しておられる者が病気で。」、このメッセージを携えて使いがイエスのもとに出て行くのです。ここを見ると、「イエスさま、すぐ来てください。ラザロが病気だから…」とそのようには言っていません。現状報告です。主イエス・キリストはラザロが今どのような状態なのかという報告を受けたのです。

⇒主イエスの応答 : そのときにイエスはこのように答えておられます。4節「この病気は死で終わるだけのものではなく、神の栄光のためのものです。神の子がそれによって栄光を受けるためです。」と、非常に

面白いことを言われました。イエスが聞いた報告は「ラザロが病気だ」ということです。それに対して、イエスは「この病気は死で終わるだけのものではなく」と言われました。主イエスは病気のラザロが亡くなることをはっきりと告げられたのです。イエスは彼が死ぬことをご存じだということ。イエスはこのラザロの寿命をご存じでした。だから、神です。

同じように、神はあなたの未来に関して、あなたの寿命に関するもご存じです。旧約聖書ヨブ記 14：5をご覧ください。「もし、彼の日数が限られ、その月の数もあなたが決めておられ、越えることのできない限界を、あなたが決めておられるなら、」、ことばの説明をします。「限られた」とは「決められている」ということです。しかも、この動詞は受け身になっています。あなたが決めるのではありません。「私は何年生きる…」などと言えないのです。神によって決められているのです。「限界」とは「期間、時間」のことです。神が定められた時間をあなたは越えていくことができないということ。す。

ですから、神が「これまで！」と言われたなら、だれひとりそれを変えることはできないのです。私たちの寿命は神が決めておられるのです。どのように生きてもいい、不摂生をしても...ということではありません。自分に与えられたいのちは大切にすることです。でも、私たちは神が定めたその年数を延ばすことはできません。すべてこれは神の御手のうちにあるのです。そのことをみことばは私たちに教えています。イエスは「この病気は死で終わるだけのものではなく」と言われて、確かに、神が人のいのちを司っていることを明らかにされました。

## 2. 主イエスのベタニヤ訪問 15-20節

そして、その後、イエスはベタニヤを訪問されます。そのときはラザロが亡くなってもう四日も経っていました。ベタニヤに着いたときどのような様子だったのか？ 19節をご覧ください。「大ぜいのユダヤ人がマルタとマリヤのところに来ていた。その兄弟のことについて慰めるためであった。」、恐らく、エルサレムからもたくさんの方が集まって来ていたのでしょう。エルサレムからベタニヤまではわずか3キロほどです。彼の家にはたくさんの方が集まっていてむせび泣く声が聞こえていたのです。マルタとマリヤを慰めようとしていました。四日経っていると言いました。聖書を見ると、このときラザロのからだはもう墓の中に納められていたようです。17節に「それで、イエスがおいでになってみると、ラザロは墓の中に入れて四日もたっていた。」とあります。ラザロが亡くなった後で彼らはラザロを墓に埋葬するのです。なぜなら、この当時、遺体を保存するような方法はなかったからです。すぐに墓に納めたのです。

そして、20節に「マルタは、イエスが来られたと聞いて迎えに行った。マリヤは家ですわっていた。」とあります。この箇所だけを見て私たちが、マリヤはイエスを迎えに行きたくなかった、もしかすると、彼女の中には何かの怒りがあったのではないかなどと思うのは読み過ぎです。なぜなら、このときの習慣なら、また、私たちもよく理解できますが、多くの慰問客がいたのです。家族が残っていなければなりません。マルタは出て行き、マリヤは家に残って多くの客を迎えていたのです。

## 3. マルタの信仰 21-24節、27節

そこで、これからマルタの信仰を見ていきます。彼女はすばらしい信仰者です。四つのことを見ます。

### ◎マルタは何を信じていたのか？

#### 1) 「主は病気をいやすことができるお方」であることを信じている 21節

21節「マルタはイエスに向かって言った。「主よ。もしここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかつたでしょうに。」、マルタはイエスに、ラザロがまだ病気で苦しんでいるときにここにいてくださったならラザロは死ななかつたでしょうと言っています。つまり、イエスには病気をいやす力があることを彼女は信じていたのです。

#### 2) 「主は常に父なる神のみこころを行なっておられるお方」であることを信じている 22節

22節「今でも私は知っております。あなたが神にお求めになることは何でも、神はあなたにお与えになります。」、「知っています」とは「経験を通して知っている」ということです。彼女は何を知っていたのか？マルタは主イエスといろいろと時間を過ごしています。恐らく、聖書には記されていませんが、イエスは彼女たちの家を何度も訪問されたのでしょうか。だから、彼らのことを愛していたとみことばが教えます。マルタが「イエスが神が求めるものは何でも神が与えてくださる」と告白したように、様々な経験を通して、このイエス・キリストは父なる神と特別な関係があるということを確認していたのです。

次に進む前に皆さんに覚えていただきたいのは、マルタがこのような確信に至った理由がここに記されていることです。

### ◎なぜマルタは「イエスが常に神のみこころを行なっていること」に確信を持ったのか？

22節に「あなたが神にお求めになることは」とあります。

(1) 主イエスのへりくだり : 「求める」ということばにはギリシャ語では二つの意味があります。一つは、一般的に人が神に求めること、もう一つは、子どもが親に求めるときに現わすことばですが、ここでは、一般的なことです。このようなことばを敢えてここで使っているのは、主イエス・キリストが人としてこの世にお見えになったとき、イエス・キリストの歩みはまさに私たちと同じだったということです。人となられた神ですから、特別に父なる神に求めることが出来たはずですが、イエスはそのようになさらずに、私たちと同じように父なる神に求めておられます。まさに、イエスご自身がへりくだった方であったということです。

(2) 主イエスの従順 : この箇所がそのようなことを示しているとするなら、ある人たちは、では、私たちも願っていることを叶えてもらうためにもう少し熱心であればいいのでは？熱心に信仰を持ってほしいものを与えてくれるのでは？と思うかもしれませんが、でも、イエスはそんなことをなされたわけではありません。主イエス・キリストは常に父なる神のみこころを求めたのです。確かに、「求める」ということばは私たちが神に求めることと同じことばを使って、イエスがいかにへりくだったお方であるかを教えていて、そのことを今見て来ました。そのへりくだったイエスが父なる神に何を求めたのか？

それは「主のみこころがなされること」です。だから、主の祈りはいつも聞かれたのです。霊的であったからイエスの願いがいつもその通りに聞かれたということではありません。

主イエス・キリストは常に「父なる神のみこころがなされますように」と祈ったのです。だから、叶えられたのです。私たちも同じです。私たちがすぐに間違ってしまうことは、自分の考えていることが最善だと思うことです。こうなることが最善だと…。でも、それは必ずしも最善ではありません。そのことは私たちはもう何度も経験していることです。いいかげんに目を覚まして神の最善を求めることです。もし、あなたが神の栄光を現わそうとするなら、神の最善を求めること以外にそのことはできません。だから、私たちは「どうぞ、あなたのみこころがなされますように、そして、あなたの栄光が現わされますように。」と神に祈り、そのように選択し続けるのです。

主イエス・キリスト、彼に対してマルタは「常に父なる神のみこころを行なっておられる、常に、父なる神にお求めになることは神がお与えになる」という確信を示しました。あなたの祈りが聞かれるために、あなたの願いごとを神の前に持っていくことができますが、あなたが求めるのは「主のみこころ」

です。そのときに、主のみこころが成されます。それは必ずしもあなたが求めているものと同じであるとは限りません。でも、必ず、主の最善が為されていきます。それを喜んで感謝して受け取るのです。そうして、私たちは生きるのです。

⇒ 主イエスの応答 : 23節「イエスは彼女に言われた。「あなたの兄弟はよみがえります。」、イエスはここでラザ口の復活のことを言われます。ラザ口はよみがえるということを約束されます。

⇒ **マルタの信仰** : そうすると、マルタはこのような告白をします。24節

### 3) 「終わりの日の復活」を信じていた 24節

24節「マルタはイエスに言った。「私は、終わりの日のよみがえりの時に、彼がよみがえることを知っております。」、すごい信仰心です。必ず、人はよみがえること、終わりの時にそれが起こると彼女は信じているのです。ですからマルタは、イエスは病気をいやすことができると信じていました。イエスは常に父なる神のみこころを求めそれを行なっていると信じていました。同時に、終わりの日には必ずよみがえるということも信じていました。詩篇16:10のみことばが心の中にあっただのかもしれませんが。「まことに、あなたは、私のたましいをよみに捨ておかず、あなたの聖徒に墓の穴をお見せにはなりません。」と。

### 4) 「主は約束の救世主であること、神であること」を信じていた 27節

そして、27節「彼女はイエスに言った。「はい。主よ。私は、あなたが世に来られる神の子キリストである、と信じております。」と告白しています。ここに記されていることは、マルタはイエス・キリストが約束の救世主である、神であることを信じていたということです。これがマルタの信仰です。素晴らしい信仰を持っていました。道理で、主はこの姉妹を愛されたはずで、このような信仰をもって主に従っていたのです。

#### ◎マルタは何を信じていなかったのか？

さて、このような素晴らしい信仰者マルタですが、弱さもあったのです。そのことを主イエスは彼女に教えていこうとされるのです。その弱さとは何か？マルタはイエスが病気をいやすことが出来ると信じていましたが、死人をよみがえらせることはできないと思っていたのです。問題はそこです。なぜなら、マルタとイエスの会話を見ていくときに、ラザロはよみがえると言われたとき、マルタはそれは未来のことだと思いました。現実には、死んで四日も経つラザロがその死からよみがえって来ることは、どのように考えても不可能だったのです。ですから、それを信じ受け入れることができていないのです。

#### ◎イエス・キリストは、

・ヤイロの娘を死からいやされた ルカ8:52-55 「:52 人々はみな、娘のために泣き悲しんでいた。しかし、イエスは言われた。「泣かなくてもよい。死んだのではない。眠っているのです。」:53 人々は、娘が死んだことを知っていたので、イエスをあざ笑っていた。:54 しかしイエスは、娘の手を取って、叫んで言われた。「子どもよ。起きなさい。」:55 すると、娘の霊が戻って、娘はただちに起き上がった。それでイエスは、娘に食事をさせるように言いつけられた。」

・やもめの息子のいやし ルカ7:12-15 「:12 イエスが町の門に近づかれると、やもめとなった母親のひとり息子が、死んでかたぎ出されたところであった。町の人たちが大ぜいその母親につき添っていた。:13 主はその母親を見てかわいそうに思い、「泣かなくてもよい」と言われた。:14 そして近寄って棺に手をかけられると、かついでいた人たちが立ち止まったので、「青年よ。あなたに言う、起きなさい」と言われた。:15 すると、その死人が起き上がって、ものを言い始めたので、イエスは彼を母親に返された。」

確かに、イエス・キリストは死んだ人をその死からよみがえらせることができたし、実際に、行ないました。それでいて、このラザロに関しては、死んでから四日も経っている愛する兄弟がよみがえることなどあり得ないとマルタは思っているのです。確かに、彼女は主イエスが約束の救世主であること、神であることを信じていました。それでいて、主イエスが全能であることを完全に信じていないのです。頭では「この方は神である」と分かっているのです。それでいながら、全能であることを完全に信じ切っていなかった、そのことを私たちはこの箇所に見ることができます。「ラザロはよみがえる」と言われたとき、彼女は、今、四日も墓の中に入れられている、からだも腐敗し始めているこのラザロが、その死からよみがえって来ることなどあり得ない、たとえ、イエスが言われたとしても...と、そのことを私たちは見て取れるのです。

☆あなたの信仰はどのような信仰ですか？

私たちはこのマルタを責めることなどできません。私たちも同じ弱さをもっているからです。神が言われることを完全に信じ切っていない、そのような弱い信仰です。多くの人はそのような信仰者であるかもしれません。なぜなら、神が「こうしなさい」と言われても、それができるかどうかを自分で判断して、できないことは「それは無理だ」と言っていないませんか？みことばを実践できると神は言われた。でも、「これは私には無理だ」と思う人にはできません。主に仕えることができる神は言われます。でも、私たちが言うことは「もう少し若ければ...、もう少し時間があれば...、今はできません。」です。

主は必要を与えますと言われた。でも、確かに、ある物質的な必要は満たしてくれるかもしれない、でも、私がずっと祈っていること、たとえば、自分の伴侶のこととか、結婚のことなど、様々な問題についてはきっと神は与えてくださらないだろうと、このような葛藤を私たちは経験しています。

主が求めておられる信仰とは、神が言われることをその通り受け入れることです。私たちができる、できないを判断するものではありません。神が言われることはその通りに成るのです。だから、神なのです。しかも、その方はあなたの弱さを知っておられるのです。ご自身が全能であるだけでなく、あなたの弱さを知っておられる神が「それは可能だ」と言われるのです。ですから、私たちがもし「できない」と言うなら、それは私たちの神に対する不信仰になりませんか？神が言われることを信じないからです。

ぜひ、考えてみてください。「私の信仰はどんな信仰か？」と。このマルタと同じように、神が言われたことをその通り信じ切れていないのか？それとも、信じ切れているか？と。

#### 4. 主イエスのレッスン 25, 26節

ここには主イエスのレッスンが記されています。25節「**イエスは言われた。「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。」**」、ここでイエスは何を言われているのか？イエスをご自分がだれであるのかを再び話しておられるのです。なぜ、ここでこのことを言われたのか？先ほど見たように、ラザロのよみがえりのことを話されたとき、マルタは「終わりの日のよみがえり」のことを言いました。彼女が考えたことは、将来起こる出来事のことです。確かに、神はそのことを約束されていると。彼女が言ったことは確かに正しいのです。みことばはそのように教えています。ヨハネ5：28, 29に「**28 このことに驚いてはなりません。墓の中にいる者がみな、子の声を聞いて出て来る時が来ます。**」と、よみがえりのことです。「**29 善を行った者は、よみがえっていのちを受け、悪を行った者は、よみがえってさばきを受けるのです。**」と。今も世の中は大変なことが起こっています。どの時代でも人々は疑問を持ちました。神はなぜこのような悪を許されるのか？と。それに対して神が常に答えていることは「それはあなたが心配することではない。わたしはちゃんと日を決めてその日にすべての罪をさばく。」です。もうその日は定まっています。

そして、神のさばきは歴史の中で繰り返し起こって来ました。ノアの洪水がありました。ソドムとゴモラのことがありました。私たちが学んで来た通りです。神はご自分が言われたことを必ず守られるのです。聖い正しい神であるゆえに、人間の罪は必ずさばくということを教えています。その日が来ることを約束しています。ですから、マルタが言ったことは間違っていないです。でも、イエスが25節で「**わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。**」と、このようにマルタに言われたのは、主イエスが神の子であること、救世主であることを信じているマルタに、今一度、主イエス・キリストが約束の救い主であること、神であることに確信を与えるのです。

##### 1) 主イエスは「よみがえり」である

見てください。主イエスは「**わたしは、よみがえりです。**」と言われました。これから先に、確かにわたしはすべての人をよみがえらせると、そのような後に起こることを言われているわけではありません。これは現在形ですから、あなたの前にいるこのわたしがよみがえりであると言われるのです。イエスをご自分がだれであるかということと言われたのです。「**わたしは、よみがえりです。**」と。つまり、イエ

ス・キリストは自分には人をよみがえらせる力があることを明らかにされたのです。わたしが望むなら、その人が死んでしまって何日経ってしようとよみがえらせることができる。わたしはよみがえりを可能に出来る力、権利をもっている神だということを明らかにされたのです。

## 2. 主イエスは「いのち」である

死からよみがえらせるだけでなく、よみがえって来た人たちに永遠のいのちを与えることができると言われているのです。

## 3) 主イエスは神である

そして、彼が確かにそれができること、罪人を救い、その人を死からよみがえらせ、永遠のいのちへと至らせることができる理由としてイエスが言われたこと、そのメッセージを今見ているのですが、このメッセージが真実なものであったということ、イエスはご自分が十字架に架かった後、三日目にその死からよみがえって来るという事実をもって明らかにされました。イエス・キリストはその死から敢然とよみがえることによって、確かに、わたしはよみがえりであること、わたしはいのちを与えることが出来るいのちの源であること、わたしは神である、そのことを明らかにされたのです。

25節のみことばは何度も見て来ました。「わたしは、よみがえりです。」「わたしは、いのちです。」と言われました。イエスはここで再びご自分が神だということを明らかにされました。思い出してください。モーセがエジプトから数百万の民をそこから解放するとき、モーセは「人々からだれがいったいお前を遣わしたのだと言われるから、神さま、あなたの名を教えてください。」と尋ねたとき、神は

「わたしはある」、「I am...」と言われました。イエスは繰り返しておられます。ヨハネの福音書の中に「わたしは...である」と言われたことが7回記されていますが、これはその5番目です。つまり、あのモーセに語った神がこのわたしであると言われたのです。モーセを遣わした神、それがわたしであると。だから、死人をその死からよみがえらせることができるし、その人たちに永遠のいのちを与えることが出来る、わたしは神なのだ、イエスはここでまた再び教えておられるのです。

悲しい現実、こうして聖書は私たちに、イエス・キリストは私たちに罪から救うだけでなく、永遠のいのちを与え天国を約束してくださっていると教えているのに、私たちは「何を信じて同じだ。何を信じて行くところはみな同じだ。」とそのように言います。なぜ、確かめないのでしょうか？買い物に行けば私たちは商品の日付をチェックし賞味期限を確かめます。からだのことを心配するからです。それなのに、なぜ、自分の永遠に関することを真剣にチェックしないのでしょうか？自分が手を合わせている存在が創造主なる神なのか？我々をその罪から救い出して永遠のいのちを与えてくれる神なのか？なぜ、チェックしないのでしょうか？

イエスは改めてここでマルタに対して「わたしが神だ」ということを明らかにするのです。そして、続けて26節を見てください。25節では「わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。」と肉体的な死からの復活のことを言われましたが、26節では「また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことはありません。」と、肉体的に生きている間にイエスを信じる者は「決して死ぬことはありません。」と言います。この「死」は肉体的な死ではありません。なぜなら、クリスチャンも死ぬからです。これは霊的なことです。生きている間にイエス・キリストを信じてこの救いに与った者は、たとえ、肉体が死を迎えたとしても、霊的に生き返った者は霊的な死を迎えることはないということです。私たちはだれも生まれながらに霊的に死んでいました。救いによって霊的に生き返ったのです。霊的に生き返った者は再び霊的に死ぬことはないのです。そのことを言われたのです。

25節では、肉体的に死んでも神はその死からよみがえらせてくださること、26節では、霊的に生まれ変わった者は肉体が死んでも霊的に死ぬことは決してないと、そのように言われたのです。つまり、救われた人は絶対に救いを失うことはないということです。そのことを改めてイエスはここで言われたのです。

そして、「このことを信じますか。」と問われたマルタは、27節「彼女はイエスに言った。「はい。主よ。私は、あなたが世に来られる神の子キリストである、と信じております。」と答えています。すばらしい信仰者でした。

## C. マリヤの信仰が成長するのを助ける 28-32節

### 1. 主イエスのもとに来たマリヤ

さて、今度はマリヤに話を移していきましょう。というのは、28節からマリヤのことが書かれています。「:28 こう言ってから、帰って行って、姉妹マリヤを呼び、「先生が見えています。あなたを呼んでおられます」とそっと言った。」と、マルタが戻ってきてイエスからの伝言を言います。そして、29節～「:29 マリヤはそれを聞くと、すぐ立ち上がって、イエスのところに行った。:30 さてイエスは、まだ村に入らないで、マルタが出迎えた場所におられた。:31 マリヤとともに家にいて、彼女を慰めていたユダヤ人たちは、マリヤが急いで立ち上がって出て行くのを見て、マリヤが墓に泣きに行くのだらうと思い、彼女について行った。:32 マリヤは、イエスのおられた所に来て、お目にかかると、その足もとにひれ伏して言った。「主よ。もしここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかつたでしょうに。」、彼女もマルタと同じことを言っています。彼女も同じことを信じているのです。「もし、イエスさまが病気で苦しんでいるラザロのところに来てくださったなら、彼は死を免れることができたでしょうに、」と。

### 2. 主イエスのレッスン 33-36節

そして、その後、33-36節まで、イエスがマリヤに与える大切なレッスンが記されています。

#### 1) 怒られた主イエス 33節

「:33そこでイエスは、彼女が泣き、彼女といっしょに来たユダヤ人たちも泣いているのをご覧になると、霊の憤りを覚え、...」、

**\*霊の憤りを覚えた** : 「霊の憤り」とは「憤慨する、怒った」という意味をもったことばです。ですから、イエスは怒られた、憤慨されたのです。また、辞書によれば「強い極度の思いやりの感情、配慮」とあります。ですから、その人々が悲しんでいる現状を見て、たくさんの人たちが涙を流しながら大声を上げて泣いている姿を見られて、イエスは怒りを覚えたと言うのです。

#### \*人類にこのような悲しい死をもたらした罪への怒り、憤り

だれに対してでしょう？そこにいたユダヤ人に対して？マリヤに対して？違います。人間にこのような悲しい死をもたらした罪に対する怒りであり、憤りなのです。なぜなら、罪がなければ人はこの死という悲しみを経験することはなかったからです。主イエス・キリストのその憤りとは、人間をこのような悲しみに導いた罪に対するものでした。いかに、主が罪を憎んでおられたことか、それだけではありません。罪がもたらした苦しみや悲しみ、そして、死に対する憤りです。それに心を痛められたと、みことばは教えてくれます。

#### 2) あわれみに溢れた主イエス 33-35節

主があわれみに満ちておられる方であることを33節の後半から教えています。

**\*心の動揺を感じた** 33節 : これは「大変苦しんだ」という意味です。

**\*主は涙を流された** 35節 : 何が起こったのでしょうか？主イエスの思いやりのことです。

##### (1) 主は、同情してくださる神である

悲しんでいる人々を見て、イエスは悲しまれたのです。「喜ぶ者といっしょに喜び、泣く者といっしょに泣きなさい。」(ローマ12:15)と、まさに、主はそのような方だったのです。泣いている多くの人たちを見てイエスご自身も涙を流された。それが起こったのは墓に行く途中のことでした。墓に向かっているときに、多くの人たちがマリヤの後を付いて来ました。彼らが泣いている様子を見てイエスも涙を流されたのです。感謝です。これが私たちの神です。私たちの痛みを分かってくくださる。私たちの悲しみを分かってくくださる。この後、イエスはラザロをその死からよみがえらせます。だから、イエスはこのようなこともできました。「少し待っていなさい。今、泣いているけれどももう少し待てば喜びに



変わるから…」と、でも、そのようには言っておられません。主は涙を流して、悲しみの中にいる人たちとその悲しみを共有されたのです。それが私たちの主です。私たちの心の痛みを分かってくださるお方です。私たちの悲しみを理解してくださる、説明しなくてもいいのです。そのような主が私たちの神であるということ、すばらしい感謝です。

## (2) 人々の無知に対して

また、イエスが涙を流されたのは、このような悲しみの中にいる人たちへの思いやりだけではありませんでした。主イエス・キリストの涙は、このように奇蹟を行なっても、愛を示しても、真理を語っても、なおも心を頑なにする人たちに対するものでした。イエスはエルサレムを見て、その都のために涙を流されました。神の救いのメッセージがあり、神の救いが備えられているのに、その救いを拒み続ける者たちに対する神の涙です。そして、その神の御子がともにいてくださるのに、そのことにも気づいていません。36, 37節をご覧ください。「:36 **そこで、ユダヤ人たちは言った。「ご覧なさい。主はどんなに彼を愛しておられたことか。」**:37 **しかし、「盲人の目をあけたこの方が、あの人を死なせないでおくことはできなかつたのか」と言う者もいた。**」、なぜ、人々はこのようなことを言うのでしょうか？多くの人たちはまだイエス・キリストを信じていなかったからです。イエスはこれまで繰り返してご自分がだれであるかということを明らかにして来られましたが、人々は信じないのです。その不信仰に対する涙です。

39節に「**イエスは言われた。「その石を取りのけなさい。」死んだ人の姉妹マルタは言った。「主よ。もう臭くなっておりましょう。四日になりますから。」**とあります。なぜ、イエスが言われることをそのまま信じないのでしょうか？なぜ、喜んで石を取りのけないのでしょうか？主がどのようなみわざを為さるのか期待しないのでしょうか？なぜ、自分の考えを優先してしまうのでしょうか？どこにいるのですか？主が言われたことは必ずそうなると思切った信仰者は？あのマリヤのように…。私たちが考えて不可能なことは「それはもう無理だ」と言い、自分が可能だと思ふことだけを受け入れるようなこと。私たちの人生をコントロールされるのは神です。なぜ、その方に主導権を譲らないのでしょうか？なぜ、その方の為さることを喜んで受け入れようとしらないのでしょうか？

でも、このような人々の前で主イエスはラザロをその死からよみがえらせるのです。イエスが言われたように「**この病気は死で終わるだけのものではなく、**」(11:4)、確かに、ラザロはその死からよみがえることによって、主イエス・キリストが言われていたことが事実であることを明らかにしたのです。「**わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。**」と。主イエス・キリストこそが救世主であること、主イエス・キリストだけが人間にとっての唯一の希望であることを語られただけでなく、このラザロをその死からよみがえらせることによって証明されたのです。

このような神を「私の神」と信じている人たちは何と幸いなことでしょうか！なぜなら、この約束は神からあなたへの約束だからです。私たちはこの約束をしっかりと覚えて生きることができます。「私は死んでも生きる。そして、永遠をこの神をともに過ごす。」と、そのようにイエスが約束してくださったからです。もし、この中でその確信がない方がおられたなら、どうぞ、主の救いをいただけてください。あなたをその罪から救い出し、あなたに永遠のいのちを与えるためにイエス・キリストは来てくださったのですから。どうぞ、今日があなたにとって救いの日となることを願っています。

(1コリント15:55-57「:55 **「死よ。おまえの勝利はどこにあるのか。死よ。おまえのとげはどこにあるのか。」**:56 **死のとげは罪であり、罪の力は律法です。**:57 **しかし、神に感謝すべきです。神は、私たちの主イエス・キリストによって、私たちに勝利を与えてくださいました。**:58 **ですから、私の愛する兄弟たちよ。堅く立って、動かされることなく、いつも主のわざに励みなさい。あなたがたは自分たちの労苦が、主にあってむだでないことを知っているのですから。」**)

《考えましょう》

1. マルタの信仰において弱かった点を挙げてください。

2. 主の約束を信じるのが大切なのはどうしてですか？
3. どうして人は、神のおことばではなく、「できるかどうかを判断する自分の決定」によって行動してしまうのでしょうか？その原因は何だと思えますか？
4. どうすれば、3. の問題に勝利することができるのでしょうか？